再版

農業全書

菓木之類

八

伊藤萬太郎記

特7
456

国立国会図書館　タイトル『農業全書 11巻』 請求記号 特7-456

ガラス使用

特7-456

農業全書巻八目録

菓木之類十七種

李 第一 三十
梅 第二 三十
杏 第三 三十
梨 第四 四十
栗 第五 三十
榛 第六 三十
柿 第七 四十
石榴 第八 四十
櫻桃 第九 四十
楊梅 第十 四十
枇杷 第十一 四十
葡萄 第十二 四十
銀杏 第十三 三十
榧 第十四 三十
柚 包橘 夏蜜橘 枸橼 金橘 第十五 三十
柑類 第十六 三十 ミカン 蜜柑
川椒 第十七 三十

伊藤馬太郎記

国立国会図書館　タイトル『農業全書 11巻』　請求記号 特7-456
ガラス使用

農業全書卷八

菓木之類

李 才一

李はいろいろあり西月色一名ろとうはいはうと大小其さ酸きありふとく甚こさ絲とあるべくうゑべし接ぎをもくはうゑ中ゑはとくとくちゑあるべく茅わかんとするとん肥地に勝れり。宜しすづつ間を置て一株植うゑ

ぶいとおかひよとかとゝ付とさくく。苗ちゝくけり
る時晦日より二月の頃梅し栽べし。春又新しこ
ゝしる処に花いひわけり。実ゝるゝ。ゝる二月
ゞり葉とく一切あとう。根乃白ゝ草あらべまゝし。
あよい古木となりてもよく実ゝるおゝり。二月一日或
十八日石灰を木のまゝにぬかけ置べゝ多くけるもの
なり（）中絶れわを塩よ漬ゝさゞゞくゝ乾
しゝさゝしゝゝるとよゝてひわりみさゝ乾し。
青よ用る時湯にく洗へべ風味よゝ

梅 第二八

梅ハ。ゝゝ花色もこと
木に勝れ百花よさに五
ゝ雪中にひゝゝ。春ま
乃操あり。実にも又味て
とにして菜となり。食糸
ゝとも。天下乃四二四ゞ。今きゆかし。花の見
ゆにして大きい必実ゝゝず。実のゝきハ花ゝと
わり。梅ハ。花実とかねゝり。雪中に花色と発
ゝ人と感ゞ。白梅あり。紅梅あり。ひゝゝあり。八重咲
ゞ。梅。花も指がくゝして。ゝゝ実ハ勝れとゝふゝ。

又信濃梅とて実小さきのかうづさのごとく塩梅にして核をぬきて実を薬味にするなり又鶴梅よりも大小美悪ありポケこれねをあらこぞ。
よ古い塩梅と多く炒へとるなり。臘月などの合味噌に
豆をかへて能く料理をするとんとうさいで今も料理
の味を調るとあんでいとこいはいしく加へ塩梅をんとく加へ
減とせーゆへとなりポ又青黄の時に能く蒸して風焼火
のとよりとさぜるべ乾し。烏梅とあるて茶よ
べるべ。又青梅乃時水糖漬梅酒糖漬さまく料
理多ー。又能しその塩より漬物日のはるよ日より干

晒し。梅干とかすもポ又白梅とぽ茶種蒸して色三
つぐにへるとうるへるるようし。白梅れ塩乃ひとさ平
ちとうろ料理ふうるすポ二合塩豆中多なり。○
ふとうゆるるポ平とと同じ。さんどもとうへ実るる多
とうるゆへぐい水とうへとさくポ。梅月の乃ポ
き梅とるらびて梅うるグまさんり。○又たき水
を梅しうゆるよい梅をたうとさんうとて塩乃所料
多くへくうのきべ梅るるふしポ。唐よのポ茶花
花乃梅もあるとんとうり。凡梅ハぽ平ぽ
茶ハぐきとれにも宜し

杏 才三

あんずは実成始早く熟し。菓子ふうの物。ふくらく熟し。しるし肉と共に実成中に埋こと能生也。二三月頃つゝ栽べし。ときは付ふしるし。○又杏ハ人家よりときは西よ栽べし。たき木を植しうめぐらしぞ多くいとみとさりへぬ物なり。肩木の下と植ときくうち。二月末ときさ三月もとさく。晩と作り為べし。果は

杏

ぶうとうくだ。花つぶこと。葉よあひしうん。早く木の下ゆ火と焼てげうとあく。花つぶこと痛まざる植よまべし。也梅桃のごい木よ接べし。桃はこの木よ接ハ実ありくたし。いのちるごき木にくべしく枯ぬ物なり。○生る杏と干さらしく。葉ふうふ。又杏仁ハ薬よ入粥にし。又物てすうとくさ。ぬ物のからゞにしてくうし。又くゝ薬しうと。ぬき。ふくく元おし。ゆ種一升くゝ木あひさかんに湯に。また用べし。ゆ種ハ。又と焼酒一升にくく薬。ハ種ハ。又六十日ふくく用ぬ。ゆ種ハ。又杏十四五升ゞ千貫日ふくく薬。ゆ種ハ。ふくく薬ゞ百二十或百ゞうし

梨 才四

梨ハ百菓の長とゝなく。菓子ゆゑ用ゐる多き事桃李に
ゝ次にて。ほゝ樂しむ病人などゝ用ひて功あるゝ
ゆゑなり。こゝ性味甘とうけてゝ。地屋敷ゝ西園のかたへ植
ゝ一和盛ゝ安し。西ゝ梨の事ハ菓のたゝ本ハ毒和氣をぬひ
ゝ和らぎ有ゝ二度ゝとゝるべし。痰ゝ涼く性さ

ゝ味もゝうすゝ。屋
敷四ゝゆるも。和氣ゝ多き。あとゝ多くゝ食べ
ゝ。○接木ゝ和方ゝ。木もゝつくゝ和方ゝ
ゝ味ゝ樂ゝ。ゝゝ味ゝ。ゝゝ
ゝ。ゝゝ二月ゝ。ゝ肥
ゝの地ゝ。ゝゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。ゝ。ゝ
ゝ。ゝ。

ぃぷ月芽わかんとする時日向のあれねくさうへ
てぐりしき絶と切く掘べし日かげの根ぃ
ゆかくまし ○ 又さて木ハ二月中旬より肥うるに
きねとれ一尺四方すぐりよさうとくおとさき
とうに歳史にくあるもにやき肥地と掘紙ぐ
よりしぐうて養去をいとくおかひろと踏付日ぬ
ひとして苗ハ活るわなり ○ 又梨をとおさうと
くの歳うげよ穴と深く掘穴の底ぬもうるかひる
きぬよして枯梨を下に敷ぎとく梨をと本うり
ろ時ぬも底付痛ぬ掘よし穴の中にるべ苗ぬ

つぎるぬよ落ひとし苗べし来ぬまでも損ぬる事
なし 根ぎるさかしさるぎ遠ぬの 又大根し梨をと穴の中
よ京とくるべ苗ぬるもうし又初梨ぬ苗とそ行
といくくた根よ小さ穴とつぎぎん根ぬよとぬ梨とさ
してそ苗ぬと穴ぬ小さぬ苗ぬるも根ぎぬ
るるぬしとぬりぬ穴ハ日ぬげとく根りてぬ酒も
なぬぬと撰ぶべし ○ 梨ぬ苗ぬ根と削ぬ苗根とひら
くと切つぎとく先とそぬぎり乾し苗ぬとと
梨花とえけりぬのごとくしとく梨ぬのぬるるを
ぬうり貢ぬよとると紀をり又酸ぎ梨ぬと書て

食にとれば甘くなるゆゑ甘くなるゆゑ也。地じゝく梨子は菓子
とゝく菓子にもれ勝まさる味あり。ゆくゆくの
地にてゝもかもうへけるゝゝくわるゝ人へ邪えと同
しわれしぶしぶかりと史記にもうんこゝろおそ乃ち
地のゆゑ近ゝさ所なるゝどゝ多くもうのべし　○梨栗
乃さうへうゝくゝ実れのゝゝるゝとべねとたらあくゝ在
多くゝゝうゝ付てが病むれゝど実るゆゑけりゝゝるゝね
本と切ゝく他のゝさ種と接ゝるもうゝ

（梨はゝぐゝこのびるゝねゝは実ゝ）

（ゝゝゝねゝとゝゝゝゝつり付とけば三年ばかりはゝく実るゆゑけり）

栗 才五

栗ゆゑ大ゆゑ丹波ゆゑ
栗を植れゝとすゝこゝ
ゝゝゝ乃中ゝるゝとゝ
ゝゝゝゝく湿地ゝ泥ゝ
ゝゝ芽ゝゝゝとする時肥
地ゝゝゝゝゝゝ根乃ゝゝく入ゝ和と
七すゝゝとゝてゝゝゝゝ中一年
二三年ゝゝく必実ゝゝゝゝゝ又ゝと和とゝゝ
くゝゝとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃種を接ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

ろべし○又ひとつく栗栗はさいの木と掘うへとそ。
接ぎるもよし○又一説に栗の木へうへすりて接し
うめぐりずるもよろしく木ふとりこうへ四まぐ久し
くなりぬれはありはやきこと時に接しうへくのかりるもか
し○又栗とうゆるもはかりうへうとまく接
ひわしかどに色こ深くなるこ。春二月の比芽わかると
えくどりうるあとを下にして深さ二三すんほべし。
あとを接とをあうえかうべ。桶に植えて沈去と入れ。
三中にとりく間日にあつべしす。地じて本となり
くもの風の強きもと云わなるゆへうへとなくぬ

乃ばまどく。まてもと植べうどゆく植れば
あらぬなり○又丹波ちくも。一さうなりとく本
に出はく中と通し。病こて実らぬあり。十月に
くぬもとふく。幹と色を下にも本の栗をかきあつ
大を分植べし。出れ完にうりうりはうる所に史入て。
こうれ出も死し。三はまうとくなるもうう再
波にくもに栗はうこと数出りふ富まどの暗く
ぐうううとふ中にはに栗へまのまこけりとこうう。
丹波乃ちはに大概赤なり。特に所へ面れかよう。
又はうきこ白はの波も栗にうこと云なり。ゆ乃

把くゝ洗ゝさ池ハ瓦ー叩ゝどゝあらゐ地ーうくゝ也一搗ハ
ふゝりさゝゐれども皮ゝぐゝく中ハ白くくたとゝ白ゐゝ。
ゝ池風氣とゝくゝあゝびてうゐゐゐゐゐゐゐゐゐ○
同ゝくゝ水洗ゝて栗とゝゐくゝ水ゝゐゐゐゐゐゐ鍛ゝし。
白ゝゐゐとひゝさゝゐゐゐとゝ搗ひくゝ一日乾ーゝも
洗ゝまげゝよゝれ他面ゝ裏おゝとなゐ ○又かち栗ハ。
ゐゝ風乃あくゝよ一和漬茹ゝくゝゐゐ日日あくゝゐゐあ
ゝさゝゝ乾ー肉ゝくゝかゐて栗くゝゐる時ハ皮と
うちゝゐゝ白ーてつゝくゝくゝゐゐもゝ ○ みゝぐ
ゝとゝ茹ゝくゝ納ゐ茹ハ箱ゐ桶又ハ壺ゝくく

も洗ゝと入れ栗乃芽の下ゝさゝゐ稱ゝて焼洗ゝく
洗ゝゐ洗ゝと茹ゝ。茹ゝまゝて茹ゝ彩ーゝさゝゐごゝゝ ○
又栗乃芽乃面城右ゝゐごゝくゝ焼ゝくゝゐゐゐ。
ごゝと平ゝ日のあゝゝゐ湯乃下ゝ茹ーゝゝゝゐ。
くゝさゝゐゝて久ーくゝたゝゐ物ゐゐゐ他ゝゐんゝは
ひゝ紀茹ゝゐゝ。製せゝゐゐハゝゝ ○又栗。
茹ゝゐゝゐゝゝゐゝ茹ゝ多くゝ切捨ゝく構の粕ゝゝゐを
けバかゐゝゐゝゝゐゝゐ

榛 才六

たべ。芋栗の如くして。
こと部丸く小さく。味くろ
こかしくろ。芋もまた菓
子のごとく。古くなりぬれば
て。湯にも煮ずしてくわけり。
飢をもゆるゆる。軍に糧れ急
枝薑はまくもゆるゆる。秋松
せうぶ。柏葉と同じ。ゆるゆる栗の如くして。
性に記すべし。餅地あるべしそ。多くもうべし

柳 第七

柳いと細乃菓子にして。
味ひなよわなる。そこ果
実多し。枝中糸状の。
こなりぬむとあれども。
和にくい。所柳と云。
地おそれて多くうゑ
ろわと記。蒲の地よ宜し。
竹あちこち宜し。小水あるとよい。
かしこ。○ゆるぶくゆ。
樺ゆと多く記。澤地よひろげたる

くかけて紀州ぞ根ぜ芽わろ時うゆべき所なり。肥てうちよ養ても合せへと。
接ぎと一づゝとゝこかなり付ときぜはわく畢
せハ薄あとそゝだ二四年の枝正月中旬を地のね
葉とうち接植とあらびく接べ。さうゝうる。
林ゝう接れゝうだいあるの接ゝうう遠りふして
ようく実ゝうるをもあるー。ぜ林ゝうれゝうるごい木ぜ
林るかゝうるあるーといへども枝ゝよりくぜい
のまくふさうゝど。必根ゝ元あるゆへぞ二年ゝう接ゝと
入痛ゝあうゝれ本の接ゝとゝ紙ゝうゝふゝうゝのゝうず。

んゝうるごゝ対れ接かれどゝと接年ゝおゝくゝ利潤
多ゝさゝぜうゝの養本乃接ゝ年ゝ新るゝ紙ゝのゝうず
と記ー実ゝうゝとゝ必ゝうるもゝうゝ。ゝうゝうゝの和
とゝゝまゝくゝ生ゝうゝ出ゝうゝうゝ。ゝ林ゝかゝうゝゝゝうゝ見ゝ
ゝうゝとゝいへども接ゝるゝ接ゝ出ゝ病ゝ林ゝゝのゝゝねと
うゝゝくも。実ゝくゝゝうゝゝ。ゝ養ゝゝうゝゝのゝう接ゝ
ゝうゝまゝうゝとゝとゝーゝゝゝうゝ実ゝうゝと林ゝうゝゝゝすゝべゝーゝ
ゝゝゝ木乃性ゝ。接ゝゝゝ。ゝゝゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ。ゝ三
月の月金ゝゝ入接ゝゝゝゝ百姓ゝゝ林ゝゝゝ法ゝゝゝゝゝゝゝ
地なり○又一説ゝ林ゝ接ゝ本ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『農業全書 11巻』 請求記号 特7-456
ガラス使用

時ふを本とゆく揚く三度よなんとうつをを柳と
きねをーとうつ拍れども甚しく就ることを○又洗
柳と洞ろ法あるまこあり先さりぐさなく久材
うとえをく桶よるーかんれ湯を入くく柳うり上
よ湯かあるる法ホして乾ろ拍ーを色を
をくおかひ桶れ色うとも色を赤くー和をく
ーーつろ日ちゞ乾ねけく甘くするおなりさ湯ら
げん柳めくりあるり柳ちく湿気つくらあ
つくすべーー又底のあくーてさうをもあるべー○
又焼柳と云ふ色も色付さるを黒ねの中を入ふ

たをしてをくふいわうけくー厚くつこけりを
ふ法ふあるくやううふ熱ーー湿気さりてを甘き
の密れごとーー又はるる柳とうあをを入を中
よ漬ふるるも数日のは熱ーー味ーーされども性
冷るるあるく法柳と毒とふ毒あるふようて
用柳すべーー○又度ばげうを焼へ乾をを鳥
柳と云ふりをきゆくるる柳るるるべーー○又柳
づさふ糯米升中かどの湯柳米干きるを接
をとをり茶の柳と同じくつき合せを食ふ味あ
まくりづーーを蒸ても色すべーー○又串柳つり柳

ほしかたさたる様の製しかたは一番二番よりも
あひくぢまちまちわもなく成たるとぢうかさよへ茅
乃もとの根と一二寸付くさ打ちかりをひさ縄よは
さこ日ふ乾し。和布もとりぢ日して干す時。
さねくづりとく。指すく様とつまこび稲ぢ茅
もひのごとくしてやぐて菓子よ用ゆるへ干
ろ時。筵よへとくろ又ハ茅の上ぢ日ろわ通ろ所ろ。
筆とわくしかけとくもうし。乾て稲
稚く黄熟なりぢ入しくとくへぢ刈
あげとくぢすても重すても切ろと敷ろべぢ

さわらぬ様ろして収め置べ間ろ
く味ひなくく成わるぢ乾を白様とも。稲花性
ぢなり。串様とぢろと干ろ時。先かりよ串を削
つ二くしに十づさ一。まんよ十串。乾を縄すあ
こ干。さ稲くづりして干あげ。乾を稲ハ別よ結
串と削つさ入ぢ。わらハ藁よ日二ぶ
ひざいく束。乾よへとくぢあ日ド○又稲よ。
七結ありとそ他の樹木よ掛ま干ぢあり。一
よハ入しくいのちるすがし。二よハ日かげ多し。三よハ
多の菓子。四よハ虫乃付ぢ。五よハ霜雹

しつべし。六月に実すぐれたるを蒔べなり。七月に
落葉田畠ふかくあつて肥ふかくして功能あり
く損なきものなり。屋敷の内に蒔べし必ず人畜
べし。○又樹藝に所ろ沼樹とも云べく家の
内助となすべし。木綿を糸菓子に用ひ樹へ人畜
ろ所なるべし。沼樹へ人畜とくられく
も。肥ゆることくべうくるるものなり。穀田のさうりょうもう
ざる所をとり人畜とくべし。沼一度して樹乃ちよ沼
らをくべし実ならとも菓樹なれば所に未ありよりと。
その助となる菓木。人畜とくられ。人の注来稲ある

所に入り肥良しとも。盛長せざる乃所
とくべし。能中繁しく実すれば大なる菓樹へ新り人
樹に肥き。稲を肥家屋敷に下にさしぶべるなどう
あるざれば実りなしとも。

石榴 第八

石榴大小あり。茎ときと雌
とあり。大く茎木乃根
を。正月末二月の初に一尺
三三寸ふとさ大指かぐな
ると七八寸。落下れ切口裏

国立国会図書館　タイトル『農業全書 11巻』 請求記号 特7-456
ガラス使用

穴をうがつてやとこうゆる所よ。穴を深さ一尺巾五寸。ほり
廣さ一尺ばかりに掘。右れなどを四方ともすべてこれに
牛馬ゐるかどの骨又ハ小石を一杯入。二寸ばかりを入て
ハ土を一杯。是も一二寸入てくるくつきかつめ。踏つかく
ゆべしくしてあれ以のあたりこと尺くぬびろに平地と
ひらこさはあとうくぶ。若にもうるれひのある所よし
とこ。けてあてく根又根ハ白ろよ。骨石ととりかけ。根よ
くさうて根ハ切て裁べ。ぞきまうけ豆をくもぞり
さうくくくるなるあり。穴を埋よ赤むはちるゆ。
十月の末ハ白ろくく色ミ二月よりとさちろべしス

三月ハ白ろさねと紙よさ。歩ハ白ろにあとそくだろ
べ。自ハ根とまるぶ。ぞ時石をいくおりとかくまこバ
さうくくうて家ハ白ろ。若ハ切さねぶとば
切ちべ。ぞ性ハ白ろ根も濃黄と。うくぶものとぬひあ
あり。年の時ハ白ろ。ひそろ。ひそろ。ぞ黄よかひく
ぶ。ハ白ろ。なり。葉の所よちうせ白ろ。ぞのうぶろ
ろあうべ。石や柱骨ととうかくわ
ぞり。○同じく石柱と根ハとくぶ。ぞくくべ。ぞ
ち根ハうとろくく。重ぶどの中にへをさてよとろ柱
湯とかけちぶ。ぞくくべ。ぞ家と乾。ぞつぶよ

ハロを紙とらとらくべ。ゆ。しくもちくも拔ぬ拔ぬ又
うく熟べしうとゆうた色三亟とても久しくうて
ねとたくく不熟ものいえしく係ずず或書云石榴を
三戸酒とうく。三戸れ出山とゆてへ則酒拔とかう又
ととぐよいなくてゆへざうわせゆ地わうべうう亟べ

櫻桃 才九

ゆうちん葉へでまうり花
よ仙くゆ。花実共に
あひらしく。石菓の先
熟しめううさわかり。

ちうよわ出て色あり。三月熟とうの時酒漬にも。
蜜にとく蒸べ。收り蒸とくくしく用ゆしゆがが
三にすよ宜し。熟して色を浸ぐ。べ。元色にしよ
て食すうわ也。漬れわ酒者に宜し。脾胃の新気
益し。ゆかうれ又一名ゆ。
実も櫻桃とう小也。楊桃と云

楊梅 才十

ひうく色にしよ大ありゆ。
紙の三父ありゆを中うり
わ三ゆ元ゆ甚く大きう。

国立国会図書館　タイトル『農業全書 11巻』 請求記号 特7-456
ガラス使用

漬れば、ろい形極早もあり。早く花咲木実の
ろまるし。色花のりさてくぶ紫ふとくまさうへてう
ろうしくんぬれども花だうんのうりはくこのうどこ又葉
細く本色のびやうあらうどこ実ろとひくもふさく味
酸く黄紫なしざろあり。色赤りうゆう
すくあらびくえべし。あしじてひくい実れなさ極
味も強茸しこ山葵うくくあの国ようてへ。
ろうまるゆ梅ありとひくもつろゆうくなろ木もひろり
○ひとうゆうはこ八月しく強しうちふとさをあろ
ひ。養汁のかーうの多く入色接ようくぬ色と

合せ古蓮ふどに包こねまとかいろぬ物よしをぬ
てご月泥とうら細にこふしー茅。養汁をひくあ
くおおひがとー付色。早せ八消ふとうぬまかて
多よかどめしー色一尺ろりけ河沢の年物しうん蓮
くぬ又年もはだい木にしてそ紫ひるるようを極
とあうびぬうくあ長接べしー又ひようゆうはたを多
く常て深くうん根のうきこ二三尺ものぞさく海
と接。養汁入ちとおひひあうべしー色ようあひくく養汁
根の下ようとへ実と早くく活ひくぬふうー根よ
養汁とにいけべうぞつ又葉の木をだい木とし

く。楊梅と接するハ酸うしずして其しるハ又家
に病を生ずる間へ草と行こそひとつとう
のべし。病そまるのくわかり

桃 才十一

りくハるとくハかざるる
くぶ多くさわしくぶ花
実の熟れくるわつりとき
とのとくハるさて
そんぶんのさり間月
りたうす桃ハ其実ハ味ひよし仙洞の

ゑ初りて又西王母と云ハひしりとぶとけるえん
き桃あり復ど桃しとくるるとふくるもの
あり又桃あり十月熟とぶ味も色も良桃よりか
ずず深しくるる也○花桃ハ白八重一重桃くも
すべきわ山ゐをふ実しぶ深平桃して一枚よりわ白桃り
咲あり色と唐人ハ月桃と絶せり行れもこと花梅
梅よりもされくとしるわかり○
三月年よハ花開実のるあり
しるとと内ぶ養法よ注こ
るをたとをなくあるて梅しうハ桃をかくぶけ

とくべし。養を用ゆるるうれしでもあとかくれば実ぬき
く苦し。但桃はよろしくふしてぞまるべしすべきうく
さうへ接しうめきびをつぎうく痛むしのけのとうりよ
一説よい接しうへざれば多くかしねとうあり。昔
桃はまぎ試ども盛もして四又年れば花をたてたた
ちさくべしやふ多くくく皮厚きゆへあらうれく痛
こ接るるたりつ又桃はうへてみてくのうるよくさうへ食
わにくくはくもるとわぐ沼光て実ぬさて十年のはへ。
ようこ接るものかわぐ毎年まをうへ接木をしてあ接
きて沼ざる接よまをくべし 但ぢんの根の細とんれば枯すす
年にあるくともいへべうしぞ

○又桃仁は茶よ入るものかりぬ塩よとを気くあつめくは
茶をようべし

枇杷 オ十二

枇杷は法菓よりもうとく
無べしめづらしき花のきう
ひもさまぞいふしぬたる
のち花よは蜜もしてうる
ものかりぬ他物よはうう
むぞ他わしべ多くもうべし。枇杷
沼ある物かりぬ色よ茸きと酸きとあり。ぬくしん。

国立国会図書館　タイトル『農業全書 11巻』 請求記号 特7-456
ガラス使用

芽さしねとあらびてうめべし但あげも大小も強くハ大
きハ雑ゑの卵ぜんぜんくらべ植ゑよ
えんこうの又木の芽ちゑく直ちゑる所ハ本かこしを
ゑのわけり

葡萄 オ十三

ぶどう色も黒くあり味
甘葡萄とて白くすき
やうくきいろあり。
色味もよし。又ふか白
色とくだの芽さ脇さ

あり長くひくうめべし。さし木ハ
本よりハ二月ねとゆくゆくふも肥こう鍬ゆよ。
箱にてく穴とつき空ず
ハ洋ゑとそくれがくまあ
ふゆく草かどめし。裏ちと
にとさ色も枝よゆく根を生ゆ
痛むすぐれとんて一年よきうそしく日こハ
くけるよちゆのくかつ切
いこり切ちかしえべ。二月末わくき根ゆ定
けると切れ。ちく猫とるし。ちん絶地を抜くかわ

げるおとしにして。あまのあをを二ばかりのよう
ぜ。眼ちを入るべし。芽立ちる時。指さるまで
るわかりよりてぜる二のうちに芽ぶくさるを
くらべ。他とかくくらべやすくぜ。やくく
ありけるばんそげき茶とつをとべし。実る
うくくまくけるのあり。○同じく柿の皮ばらく
ぜしるとのりげのあく。完と掃。上りて一房ぜく
ひけざる柿。ちうとさ。つき合ぬ柿よ。完柿
一ぜさ。ぜ。こるどゆくおかひをしぼりて
ひりんざる柿よしてだとおひとけぜ中も形

しくたくわるかなり。○又乾葡萄を造る法
いくふもうく熟。ぜ。うとかそして而ぜさりをぜ。
ぜざる柿。して。密とあるよ合せざるとぜあ
あい煮く。布にくこ。所ぜんどへかげ干をを
れぐ。卯かくすりそ味すぐ。ぜくくあかり。
茶かりぜ。色変りも損ぜぜ。近多おりく夏服よ
すすわり。佳味なるあり。○又葡萄酒を造る
ぜ。ぜ。ぜ。葡萄。そいあるねかりとるさり

銀杏 才十四

銀杏は二月白さゆへ
おりん酒とよれば鴨肺
ゑぞ茶茶乃なり鶴の肺
よ仙さうゆへかくハ云と也。
そ木ゆく直よしく
陳梁よも用ゆべ二月花ひらきそ
しく実を結び九十
月よ熟し落ると拾ひとく俵よ入る門渡よ漬を
さ肉さ煮てかと洗ひ清くしてドかう実を丸。
干かく炒くかとを茶よにのよ入る。

銀杏

乾薑多きさわかり毒をけし。痰をドし。酔をさ
まし。そ和肺の病よ効宜し。さ仮ども小ゆよ
ハ毒なりらへべらむと ○うゆるの二月かどなりと
ゑらびとく地堀よう人をさ三年の接梅し挿べ。
但大木とかりとくわれさりかき地を撰ぶべ。早
く実を結ぶをとらひとのぷくるる木れ面枝を
ゑらく接べ。山木雌雄ありて雄木ハ実らと雌木
を多くうゆべ。二かどのわ雌ありこ二かどハ雄木なり。
されど雌木許もうゆべらむと。女木男木実てうゆれ
ハまよらとあひてよく実らも云なり。又女木を

あり多とよう〳〵そこ新をてゝせばあり遠とゝんく。
ようるるともいてなうう

榧 第十五

かやの実も木も花ばかりに
絞れくるわかり。苦味とよ
てうゆる法れゝく製へ
用ゝ蒸さうをひろひ中
ようさうとさを肉せよ。
紙法ようとさ二三年のほたんと付く拾しうの
べーぞよ大かあり。よ其味多さあり小さくして

榧

殺ひあるもあり。うゆる時さ孫とあるべー。五
枝ゝ多ハ秋榧しをけづゝ長ゝと指ひ傷よ川
にさりとさぱくれゝ時洗ひ年よく保ゝよ
の出べー。○苦味こくへ榧の木十分多ゝ
ぬれゝぞ一かと液せれゆとなりぞ
よ家をゆまるにハ榧の木伐なとよ老し伐
ハ住居の多ゝどゝよけあゝゆゝとゝ伐れゝぞ
伐よもゝ山中よハ法味苦れ分よとゝねもゝ乃
よハあゝぶれゝぞ領ようゝ仏堂へく
ゝよかけ榧のようへとゝそ。ゝ木ゝうゝ拾うゝと

植て漸くに密也し多くなるべ多年の後はけらざる福とゆを里方るにぎりひ弟とるすべ

栂類 才十六

蜜橘の新らく多し。
栂柚。橙。色橘。枸櫞。金橘。
いかに。反蜜橘だやうたら。
ぎやんが。すの栂。山ぶれ。
九種漢ちうれ。
日本紀に人くさうかにも橘れ分岩脈なり。○

ぶとうゆりは。肩紀と。
枳殼せばをそぐ。
ほ。ぶ。
ぶ。
ぶ。

刈り出の元のようにこしらへ置も出来るなり○又
椙橋の新い根のよを多くうへくさ出てたゞ植ふときは
の時だいまよして植こうがこうし迷うなり絶ぬる。
いろいろも多く苗出てもびきよもはりぐさへ木の
時は苗を多て一ずつ肥よ植も裏を多く植て。
一尺一ずつ植ふうへだいまの法よりこうは月
末二月上旬うりつきを種と求めて植べし○植し
名菊竹ばかりこうは細さざいまあらびち除うり三寸或
四寸竹をさそうりはりくさうは少かうくぬしそ
こねざうはくは法目と刈つもこにあるとも法

内乃乃とゆかれたるとくに一寸種一本八袋よりは
とく種のうざあとよく合ひとふ切さ切ぬた種長
さ三四寸竹葉と三葉だうりをさそ三分一とば。
うざうりくざこの木れ刀めふ合せ種乃りとぬく
以品中に氣とりくそざ出よさうへまぬりとう。
竹のかいたさ油紙とも一名を二名を考ことあ
ら考うぬ乃りに折りたくちうとくたいくくた
ぬこ寸ばうも上下しこをよを接目よりの入さ
ろ植こ竹の皮とそ色をねぐさたを泥とふし色
うとうりぬりだいまの植めうりとづうとぬらぢし

くおーとさ。上も白うもぞこと。にくかこひ。雀草と。
だい木の白うふうくさうかひをねぞこをばの明
て。氣をおーとくべし。二月ハ芽のうおんぞの芽のかうく
らをわんとするはんとこめ会とへまき。搖くこハたくさ
付ものあり。他の樹木へ搖法名くわうといへども。橘乃
類ハ搖はうー。泥まく。搖ハれ下と厚くわり色ぬ
きぞとかうの根をうて。第日ハ上くいぞうろ根うう
多とそくだうかひと絶をべうず。種とうくもうぶ
べー。ちうたくうろ根ーうーしとあ根のうろうくふ
とく。茅れいうふもかうくうむと用ゆべー。種の茅さい

よ。あに向ようたくかう切合をうあなり。○又椎ハ
宮。氣をおううゆぐゆうあの方とうくして。
作るとうの。風宮をとうをくべし。ちくの乃基ハ和
あうば。棚とかきおかひとし。二月ハまべー。大木ハ棚とう
くうぞり雖ー。木ハ白うよ。稼と多く色。ぞや種
多わうるどにく。稼と書色又ハ書ハ色るど
にくく木とゆくきぞうう引ーよ稼とうるもよー。椎ハ。
ハ宮ハ。ちくきぞ。ハ。○又椎ハ。ハ。ハ。

ねかどをけうして十一月初比なら橋いまうゑ拵せ
ざる時ハ乃ぞ乃さハ一二すねと付くしく一りく切れ
のあらねかくきを植うくとあふべし
ばくあげおとそとんが久しくこと入をハ
ちづくに入べしかりそめよもなげ入べくうずのよわ
さる所へこ春うり賣こ入おのう濃り地よおくしう
とびうこのけとくべし。春まくもくえくしくとくべきか
らハ濃まけ紀州の元とかり屋こ作のようう
ざにくも一ものとそざとれ中にうんのくきとき一つ
ぼく付合ぬ根くに植べし。色ハ多くなくなくぬるすけ
ハ元乃ぬ中にまた松葉を厚く敷くつきあらね植し。

乃ぬもまた松葉とかくく濃て。西風乃ときうざる植よ
おかひとしてあくうとくかこんひまくろもこ地濃
まさくかくハ。三月まくだ概ねうこねねねなり。濃
分濃まけ植かげを撰ぶべし。○又濃も濃日
日ねあくらぬ中ハかさをうくゆひ色ーぷく草
ある所ハ植ようーぷまけきあんぱううひげとおか
くあまくまくに植ねごくゆれくうこかんをふくべを
くべーふくさ莢かげふくくかんも日ねくくねあ
ようーぷまくにあひても。まの濃りうまくく植ぐるみ
ふーぷ日かあくハ病むねけりぷよ松葉をうすくれ

かひとくべ。わくおひとひらきて尺ばかりよく
さうめへさるあるとバ。ぶつかーもべ。ぶつくあらく。
よ用と給らるあ〜。竹葉ゆ中かどうくかこひく。
かくのごとくあるときさうあるようしてぶ。ぶかるどうて
差めとくはせ。○橘の実ハ菓子ハ用ひ結きてる
黄紙たり。皮樣子も皆菓子入ものあり。陳皮ハ云よ
及ハど。八月いまごろ。ちさ時ゆ切ろ。内さねとば
玄皮と干よとく。青皮ハこてくく。茶屋ようくべ。
多くゆ用ゆ。ゆ。地ようお紙乃所ようくくくうく入
茶てくも。ゆをとく黄柿のたようあ〜くゆ製〜ゆ

ごうとうて。利分おきて所ようくくくうくべ〜。○又金柑と云ハ
らくうくべ〜。○又金柑と云ハ。十月ハ好。色
もゆぞ付一すもとさくゆ切れ。ゆ〜くあくうず〜
く湯ゆうつハ和よ入茶ハ損せどゆハ麻乃ようゆ。
乃中にまぜくとひべ。長まぜ。ゆうくあるる色。又
右橘のかこひ柘と同じくすれど。変まぐもいさま
ど。茶海乃近きゆ所よハ玉べくくくくくくたくく
わすり。○柿ハの木ハ白ゆ。掃除〜。根ざハまぜ。少
ゆ乾ゆ。ゆくくして。宮中ハ。わさ洗くかさ。洗ま異。
牛ゆ糞と入まこ。海藻ある所あるべ根の白ようお

かく成ひろげ芸れば。わつがこゝろ水時ろに橘のくさ
らゝなどとすくして木れよりうちに又小深を
うちろも木くさゝ多くなりとく実も大きさ
なり又畠ようくをきこゝろにさいるる作りわり
業ーと多くをれば大ためよろ用ひずしても
ムるしかるど○橘の根ゝ蔵と書ゝするゝもとぐ
まつとくゝくきくわなり死蔵を小深つれ中ゝ入を
きて教日の侯ゝくれくうさよるとえく根ろ白ろ
ゝ深ゝ並べさゝくゝ芸げるゝ。かざゝうかしゝとたゝうゝ芸
侯へく。湿盛縄ゝも橘の蔵とゆるゝ水ゝとゝ功力九

迷ゝ小多のさるゝと教ゝとあんゝ又侯ゝ橘の根下ろ
猫と侯ゝくさゝゆゝとゝ芸あゝゝ世ゝ○又植橘ゝ畑
狩れ地ゝ宜ー。通方愛ゝるゝ西とぬゝ地ゝるゝ
でゝくさゝゝ芸ゝ。ゝ芸ゝ芸ゝ。ゝ芸ゝ芸ゝ。ゝ芸ゝ芸ゝ
ゝゝゝ橘ゝ教ゝ下ねゝ多ゝくゝ芸ゝ地ゝゝ下ねとゝ
ゝゝゝず○同ゝくゝ大小ゝゝゝゝゝゝゝゝ地ゝゝ同じ。
完ゝ屋ゝ深ゝ沼ゝ洗ゝ糞ゝ芸ゝ合ゝ世ゝ入ゝゝゝゝゝ木を
屋ゝ肥ゝ芸ゝゝ。完ゝ芸ゝ芸ゝ芸ゝ芸ゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝ。糞ゝ泥ゝ芸ゝ。ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

国立国会図書館　タイトル『農業全書 11巻』 請求記号 特7-456
ガラス使用

乃中にてうさうこのるゐ。おゝかゝりこと。菓木乃
外。えんさいのごとくせざれども。病て食するの色
黍性の者は実を多くとらんとすれば。養一。ゝ人をつ
くすべし。大概乃去泥にて。たゝしゝなん。利分をもち
補ふこゝろのわるし。唐人も面ようとく。鮓
うゝ。ゝとくゝろ。ゝ利とゆるゝ。ゝ一と。話書に祀
ゝ。ゝ。本草。四年ゝ一。ゝとくゝ。ゝうん大梅乃末とゝ
ゝ。ゝうゝくおくゝゝ。ゝ。四年ゝとゝ。ゝすゆゝゝなゝ
おゝとゝゝゝ。ゝ橘橘をゝ。ゝの泥ゝて持ゝゝ人へゝ。ゝ
ゝゝゝゝ。ゝ。ゝ侯とゝゝゝゝ

沒但ちうあり。物食と云ハ。ぴつの山椒とハ。そ枝
茶かうりく。別のわかり。凡山椒ハ。科たれ。毒味。而
ぴつ。毒の臓よ必用ゆべ。毒毒とれ。毒殺すなり。○う
ゆうぴつ。ぴく。筆。自ら口とひらさうと。毒
く。二三月の月。地と。唾ひり。ぴ。ふ。ぴ。
とそ。とそ。ひ。ぴ。毒。毒。麻の苗。
ちう。ぴ。と。毒。厚さ。一寸。ぴ。
ぴ。筆。毒。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。
う。ぴ。中。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。
ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。

とうく付。油相ひきれざる物。ぴ。抽。ぴ。ぴ。
生。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。
よ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。ぴ。
ぴ

成る大切なものなりと云ふ。
よつさてもんあらん人か米も塩ーこさもよとを
へそぐつる道こ芋ちんを用ゆべきりのかりぶ三下
ぶさうかりぶ氏れぶ人こよいこうまくぶ氏と奥ー。
家と亡ひとる。名こちよれ若無貫ふこうーず
といつるかーぶく考人心を用ゆべー。○さて漬
ざんせうへぶよれいまぐ出ぶうーざるはこ月ハ氏れて。
解こ一塩漬ちさ者ことおー。こ塩みこ漬ぜ。
ま蓴の板と同ーく漬てのかぶ氏宜ー。○干山椒
ハぜ月あくーくろ紙とくはぶ天氣のこちさはとりて。

特 7 11 456

漬く掛げ干晒ー。一日の中に干てひるさ
ゆり事なくーくかいさこちと。印牧ちくべー。溫氣
ふあハとづーず。又花ぐーり保ーく実ーぐろあ
こ。ぶハぶ表皮と剥ちかーぶ皮ーとかー。硬ーくぐ
川と煮てあーち皮とちり。浮く洗ひ塩漬に漬ぶ
て用ゆべー。山椒と巻ちとくーくかハちて
と焼かーりこをくべー。又飛鼠こ入ぶ氏ぶ
くよりこうーくこくこくこくこうーぶ。
ちる蕃こ汁ちをこくこちーと。

農業全書巻八

国立国会図書館　タイトル『農業全書 11巻』 請求記号 特7-456
ガラス使用